

はじめに

明治29年5月刊行の『北陸人類学会志第一編』に「金沢附近浜海石土器発見景況」と題する遺跡の踏査報告が掲載されている。報告者は宇野富良（うのとみすけ）、河北潟と日本海に挟まれた一帯の砂丘地で粟ヶ崎・大根布付近を主なフィールドとし、明治22年の夏以来百回に及ぶ踏査を行った人物である。(注1)

粟ヶ崎・大根布を中心とする砂丘遺跡からの採集遺物の一部は金沢大学資料館に「四高考古資料」として保管されていることは本紙第7号で述べたとおりである。宇野は北陸人類学会の創設と活動に深く関わった。小稿では宇野の人物像に触れてみたい。

1. 加賀藩士宇野富良

宇野は加賀藩士で代々鷹匠を務める家系に生まれた。金沢市立図書館所蔵の宇野家の『先祖由緒並一類付帳』によれば、宇野は金沢小立野鷹匠町父宇野大作方に住み、年齢27歳とある。(注2)

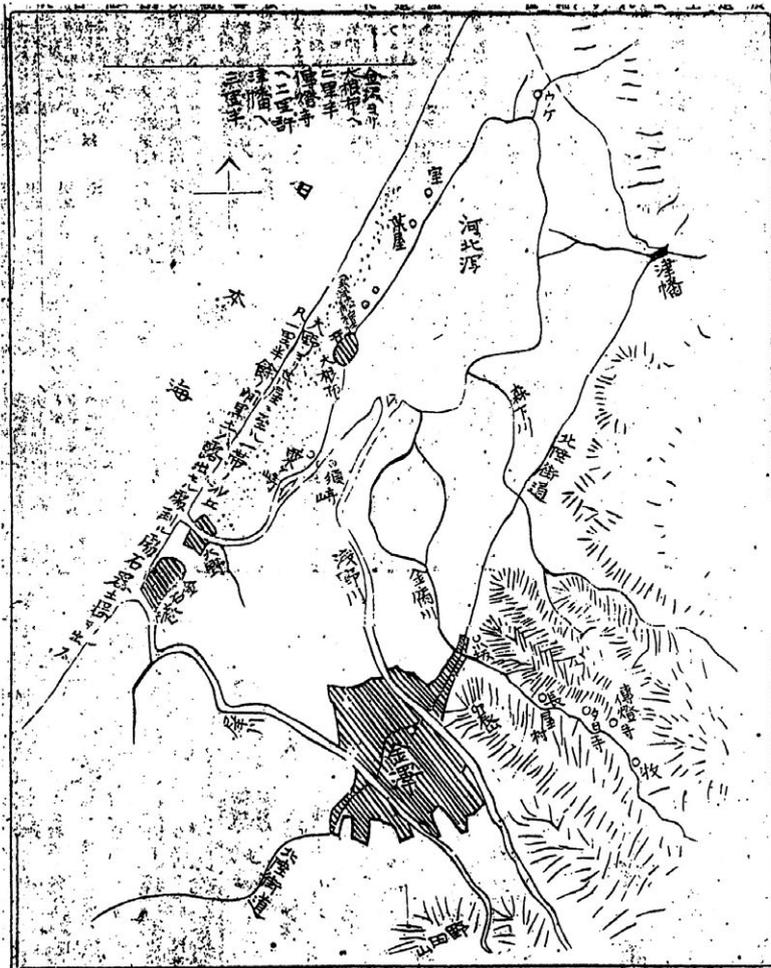
宇野の父大作の七世祖父四郎右衛門は加賀藩3代藩主利常の代に鷹匠に召し出され、五世祖父七郎右衛門の時新知百石を得た。また、宇野の叔父には加賀藩に招聘された洋式兵学者佐野鼎の義弟である宇野直作がいる。宇野の父大作は海防方大筒照準役等砲術方を勤めている。

宇野は、安政3年に御鷹方として加賀藩に初めて雇用され、同5年には御歩並御鷹役に召し出され、切米30俵を得ている。文久3年には海防方臨時大筒照準役等を務めている。

元治元年12月、水戸天狗党の上洛を阻止するために加賀藩は出兵しているが、その際、宇野は砲兵として出陣している。

宇野は藩の命により慶応元年から京都警護にあたるが、同3年1月金沢に帰り、壮猶館入塾を願い出る。同年3月壮猶館に入塾、英学を学んだ。壮猶館では稽古方指引等を勤めていたが退塾し、維新前夜の京都に向かい、「凝花洞前御固所」で京都警護にあたる。翌慶応4年1月鳥羽伏見の戦い後、朝廷は加賀藩に命じて在京の藩士に橋本閨門（八幡市）を固めさせるが、宇野はこれにも加わっている。同年閏4月金沢に帰り、砲術教授役、少属大砲隊翼長等に任ぜられた。

明治2年末宇野は大坂兵学寮に学ぶため金沢を発っている。大坂兵学寮は、明治2年9月新政府により創設されたもので、同年12月から新生徒を入学させこれを青年舎とし、歩・騎・砲の士官を養成した。陸軍士官学校の前身である。明治3年1月4日に宇野は入寮し、砲術を学んだ。以上が由緒帳による宇野の経歴である。



「金沢付近穴居の遺址及石土器発見の図」『北国新聞』明治28年9月6日付



宇野富良
 「明治 37 年度親睦会」
 『金沢日本基督教会五十年史』
 (金沢日本基督教会編, 昭和 5 年)
 から転載

ところで、河北潟と日本海間の砂丘地と宇野を結ぶものに、宇野の父宇野大作富素の由緒帳にみえる白鷹捕獲の一件がある。

安政 4 年、加賀藩の鷹匠宇野大作富素は、砂丘地河北潟中央部に位置する黒津船権現森に現れた白鷹を捕獲しよう藩主の命を受けた。大作は砂丘地河北潟北部の荒屋の小祠に祈願し、ついに白鷹の捕獲に成功した。大作はこの時の神徳への報恩のため藩主に出願し、この小祠に社殿を新たに造営し、黒津船の西宮を勧請し蛭見神社としたという。宇野自身は前述のように安政 3 年に藩の鷹方となっており、翌 4 年の白鷹捕獲には父に協力していたことだろう。また砂丘地南部の粟ヶ崎には藩主の休息のための御旅屋があり、放鷹がしばしば粟ヶ崎で行われていることから、宇野は維新以前に何度も砂丘地を訪れていると考えられる。

なお蛭見神社を勧請した神職は、当時石川郡五郎島にあった小浜神社の斎藤政矩である。宇野と同じく砂丘遺跡での採集活動を行った北陸人類学会員斎藤義基はこの斎藤家の子孫である。

2. 軍人宇野富良

金沢市野田山に宇野家の墓所がある。宇野の夫人柳の墓碑があり、ここに刻まれた銘文によって明治初年以降の宇野の足跡を知ることができる。これによると明治 5 年砲兵将校となり大阪に在職、明治 10 年には西南戦争に参加している。

宇野は、薩軍の熊本城包囲を解くために明治 10 年 3 月に背面攻撃軍として編成された別働第二旅団に加わった。熊本城に敗れた薩軍は人吉で再起を図るが、別働第二旅団を中心とする政府軍はこれも陥落させる。この人吉戦で砲兵隊を指揮する司令官の中に「宇野富良大尉」を確認する。(注 3)

宇野は西南戦争後は、明治 14 年に東京へ、同 18 年に仙台へ転任し、同 21 年休職し金沢に帰っている。

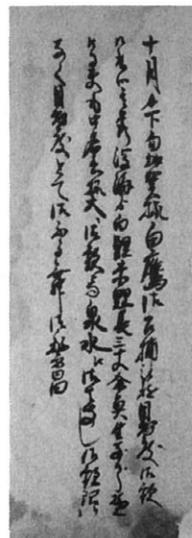
なお金沢では明治 8 年に名古屋鎮台歩兵第七連隊が置かれているが(第七連隊は明治 31 年に第九師団に編入)、当時粟ヶ崎は陸軍の演習地であり、明治 41 年には演習のための陸軍廠舎が建てられている。

3. 北陸人類学会での活動

明治 28 年 9 月 7 日、「北国新聞」に前日までの人類学関連の記事に寄せて次のような投書が載る。(注 4)

「此頃貴社新聞紙上に石器発見に付ての記事を散見せるが余も又一話を投ぜん」以下粟ヶ崎大野間、金石の西方犀川左岸の遺物採集をここ数年来行っている」と述べている。この投書の主は「宇野生」となっており、これが人類学会の設立者の須藤求馬と宇野の出会いであると思われる。宇野は学会の創設時には 12 人の発起人の中に名を連ね、評議員として会誌編集などの事務にあたり、転勤で入れ替わる会員の多い中、地元の会員として北山重正らと会の実質的な運営を支えていた。

『北陸人類学会志』の発刊の辞には、開発により遺物遺跡遺風遺俗の消失する危惧から早急にこれらを調査研究する必要がある、この研究を志す者の情報交換の場として刊行に至った旨が明らかにされている。発会式に寄せた論説で坪井正五郎が人類の理学と明快に定義している人類学の対象は、この遺跡遺物遺風遺俗であった。民俗学的なものや考古学はこの時代では未分化であった。



「松島家文書」(11p 参照)にみられる安政 4 年の白鷹捕獲の記事。河北潟の白鯉赤鯉とともに藩主はこれを吉兆とした。



「四高考古資料」資料館蔵、「加賀国石川郡粟ヶ崎」との注記がある。

宇野は例会では砂丘遺跡の遺物を報告・供覧している。さらに宇野は金沢地方の方言に興味を持つようになる。明治30年の第15例会で北山重正が「方言取調に就き」と論述し、それを受けて宇野が「方言取調報告」を同年3月第17例会から始めている。報告は明治33年4月第49例会の10回目まで行われた。その成果をまとめたものが『会志』第3編と第4編「北陸地方方言、金沢方言」であろう。金沢地方でのみ行われ他の地方では通じない語・いわゆる俚言、および訛語の顕著なものを収集し、イロハ順、事象別に配列したものである。これらは宇野自身の内省により記録していったものと思われる。なお当時、帝国大学が各方面に委託し全国の方言の調査を行い、石川県の分は明治34年に『石川県方言彙集』として刊行されたいきさつがあり、識者の間で「方言」が話題になっていたものと思われる。民俗学関係では宇野は明治32年2月の第40例会で「子供の遊戯に就て」という講演をしている。

時は下るが、大正12年の「大根布付近の遺跡」『石川県史跡名勝調査報告第1輯』には、宇野と前述小浜神社(明治22年に五郎島から現在の地大根布に遷座)の神職斎藤義基の砂丘遺跡における採集活動について記述があり、「宇野氏蔵」の遺物の写真が掲載されている。同報告巻末の遺物図版も宇野と斎藤の両者の提供であり、遺跡の調査には斎藤とともに宇野の協力もあったと考えられる。

4. 宇野富良の信仰

宇野富良には、基督教徒としての顔もある。宇野は明治26年金沢で洗礼を受けているが、それは柳夫人

の影響が大きい。再び柳夫人の墓碑銘を見てみよう。それによると、柳は明治10年宇野とともに大阪に在住中、米国婦人宣教師アッキンソンに基督教について聞き、同11年澤山保羅から洗礼を受けている。同18年に移った仙台では基督教会及び同婦人会のために力を尽くし、同21年金沢に帰る、とある。

さて金沢においては、石川県中学師範学校の教師として招かれた米国人宣教師ウインが、明治12年基督教伝道を開始し、同14年金沢市大手町に金沢教会を設立する。『金沢教会百年史』(1981)によれば、柳は同教会へ同23年に転入している。『金沢日本基督教会五十年史』(1930)によると宇野は、明治末から大正初期にかけて2度の長老職、大正2年に創設された「金沢伝導会」では評議員を務めている。

『北陸人類学会志』にある宇野の住所は金沢市飛梅町71番地である。当時飛梅町にはウインの家と(明治21年1888建設)、ウインの設立になる基督教主義男子学校北陸英和学校があった。(注5)

なお、同教会には阿閉政太郎、四方田慶治、市村才吉郎らの北陸人類学会員の名がみえる。彼らの人類学会への入会は宇野の勧誘によると考えられる。阿閉は明治8年石川県師範学校小学師範科を卒業、石川県尋常中学校等で教鞭を執り、彼の蔵書の一部である「阿閉文庫」は四高図書の特設文庫として本学附属図書館に所蔵されている。

昭和5年5月宇野の属する金沢教会では創立五十周年の記念事業が行われた。宇野は同年12月24日に永眠する。

注1 須藤求馬「加賀国石川河北二郡の石器」『東京人類学会雑誌第120号』明治29年

注2 後述墓碑銘によれば宇野は嘉永元年1848生まれ、由緒帳の成立した明治3年1870現在宇野は満22歳である。実年齢と自称年齢の差はこの後一貫して5歳を保っている。

注3 「将校姓名便覧」『征西戦記稿附録』明治20年、参謀本部 「人吉口戦記」『征西戦記稿巻中』明治20年、参謀本部 「人吉陥落後の戦闘」『西南記傳中巻2』明治42年、黒龍会本部

注4 掲載した略地図は同紙明治28年9月6日付である。

注5 明治16年私立愛真学校として創立、明治18年北陸英和学校と改称、明治26年北陸学校と改称、明治32年廃校。

石川県立図書館 室山 孝氏と石川県埋蔵文化財保存協会 三浦純夫氏の御協力をいただいた。(資料館)